

「さまざまな偶然の糸が繋がった。今考えると不思議な巡り合わせだ。2001年12月に青森市制100周年を記念して国際芸術センター青森（AAC）が設立された当時、市長を務めた佐々木誠造さん（89）は振り返る。

作家が一つの場所に一定期間滞在して創作する「アーティスト・イン・レジデンス」は当時、欧

② 最先端の「滞在制作」

米で広がっていたものの、日本の美術界では最先端の考え方だった。佐々木さんがその言葉を知ったきっかけは、同市出身の版画家関野準一郎をテーマにしたシンポジウムで、基調講演した東京大学総合研究博物館の西野嘉章教授が「青森から野々木さんは語る。」

米で広がっていたものだった。当時、県都に美術館 AACの初代館長にならななかった。立派な大理石の美術館を造るお金の無いが、アーティスト建設する際、開発を避けるため広い範囲の土地を確保し、自然を調査していた。そこには希少種の昆虫、鳥、豊かな植物が

青森の自然と風土の中で



佐々木誠造さん

まれている。こつこつ風土の中でアーティスト・イン・レジデンスを行えば、素晴らしい作品ができるのでは」と話した。そんな時、同市出身のアーティスト・イン・レジデンス（16年死去）と出会った。浜田さんは世界各地で滞在制作の経験があり、佐々木さんにリポートを送ってくれたという。作家の視点を持つ、海外とのネットワークもあった浜田さんは1999年「仮称」青森市芸術創作工房「デ



雪に覆われたAAC。世界的な建築家安藤忠雄さんが設計した。1月13日撮影

事実」とした上で、一番の売りは自然の中にある環境だと強調する。建築は、1999年に行われた指名参加型の公開設計競技の結果、安藤忠雄建築研究所が選ばれた。コンセプトは「見えない建築」。可能な限り木を切らず、建物が森に埋もれる形にした。

※AACは28日まで休館中。

者が少ないとして、市議会でも取り沙汰されたこともあった。開館当時から入館無料で、来館者数は新型コロナウイルスの影響を受けた19、21年度を除き、おおむね年間1万〜2万人台で推移している。佐々木さんは「市街地から遠く、バスや車に乗らなければ気軽にいけないのは

えに出てきた人たちです。そういう高い評価を受ける強い精神の持ち主が生まれるような場所をつくりたかったのです」（一部略と語っている）